

## 仁淀川メッセージ（10人の団体発表）

（1）いの町観光協会 事務局長 森憲司さん



- ・今までは各市町村が独自で観光イベントなどの情報を発信していたが、昨年11月に、仁淀川流域の6市町村による「仁淀川地域観光協議会」が立ち上がった。リバーツーリズムをキャッチフレーズに活動をはじめた。リバーツーリズムとは、都市の住民が、緑豊かな仁淀川流域を訪れ、地域の人達と様々な体験（茶摘、山菜取り、川遊びなど）を通じて、のんびりとした時間の中で、自分を見つめ直し、また来たいと思えるような心に残る体験ができる、こういうことを目指している。
- ・全国でも常に上位の水質を誇る仁淀川、水辺利用率全国トップクラスの仁淀川は、様々な地層を流れてきており、約4億5千万年前の地層が横倉山には見られるということで、非常に石の種類も多い。
- ・波川の広い河原をキャンパスとして、波川まちづくり委員会が河川敷に放置されている竹林を整備し、その竹を使って竹灯りを作り、いの町観光協会主催の「仁淀川神楽と鮎と酒に酔う」でも披露した。また、仁淀川の清流保全を訴える映像も流しながら、仁淀川对环境に対する啓蒙活動も実施した。
- ・また、毎年5月3日から5日の3日間には、仁淀川で紙の鯉のぼりを実施しているが、イベント終了時に紙の鯉のぼりを来場者に配布している。3日間仁淀川の水に浸かった紙の鯉のぼりを洗って配布しているが、非常に泥臭いにおいがしている。水がきれいだといっても非常に考えさせられるものがあると思う。水の恵みで栄えた流域の住民として、身近にあり当たり前と思っている仁淀川の水について、もっともっと関心を持つことが大切であるし、仁淀川を守る為に、子ども、孫たちに引き継いでいくことが私たちの責務である。

( 2 ) 仁淀川の自然と清流を守る会 会長 吉本重晴さん



吉本重晴さん(右)

- ・ラブリバー仁淀川パートナーシップについて説明したいが、当初5団体で活動をはじめたが、早や9年目を向かえ、現在は14団体が加盟している。活動範囲は国土交通省の管理区域である、いの町の加田から下流である。
- ・ラブリバー仁淀川パートナーシップとは、ずばり、仁淀川を愛すること、この志を同じくするもの同士が連携をして、清流仁淀川を守っていこうというものである。端的に言えば、清掃のボランティア活動である。河川敷等の散乱するゴミを取り除いて、美しい河川環境をつくろうというものである。具体的には、河川を取り巻く地域住民と行政が一体となって、清掃活動を行い、河川環境に対する意識の向上を図っていくものである。
- ・この活動をしたい場合には、国土交通省と団体の間で合意書を交わしている。担当区域を決めて清掃活動は年3回以上行いましょうというものである。そして年に1回、14団体が合同で、一斉清掃を実施している。例年川遊びのシーズンが終わった10月の中旬・下旬に実施している。

( 3 ) 国友商事(株) 代表取締役 國友昭香さん



- ・私は、「仁淀川水系エドヒガン1000年の森」という大きな夢を持っている。父の代から林業を営んでいるが、当時は高度成長期で、スギ・ヒノキの植林をどんどん行った。私が大きくなった頃には、一切働かなくてもかまわない、1日に百万円ぐらい木が太っていると聞かされたものだ。子どもの頃には川が大好きで遊んでいたが、8月の始めに台風が来れば、ほぼその年は泳げなくなるぐらいの水量があったが、最近は大雨が降れば2日ぐらいで水が引いてしまう。
- ・父の後を継いで、林業・土木をやっている中で思うことは、植林をやりすぎたので、間伐を進めれば山が戻って、水量が戻るといわれているが、どうもそれだけでは無い様に思う。また最近のデータでは、スギは保水力の低い木だと言われ始めた。そういう中で、岡山の醍醐桜、岐阜の淡墨桜、高知県のひょうたん桜、これはすべてエドヒガンという、桜の中では長生きの桜で、桜は非常に保水力が高いといわれている。昔の拡大造林政策は、林業をやっていて失敗だったかなと思っているが、当時は敵地、不適地の実験が日本中でなされたので、そのデータに基づいて、より良い林業施策を実施してもらいたい。
- ・これから3月上旬に、仁淀川水系の国道194号線を北上していただくと、いの町の神谷の辺りに、一番早くに咲く桜があり、よく観察してみたらひょうたん桜（ひょうたん桜は固有名詞で、種類はエドヒガン）で、仁淀川水系はこれが非常に多い。個体数が多いということは敵地と思うし、非常に保水力があるということなので、この桜を増やしていくって、千年先、非常に水量がある豊かな自然を育んだ仁淀川水系でありたいというのが、私の夢である。竹が多い山は良くないので、竹を使った筏レースをして、竹の退治もして欲しい。

(4) エコネコ 代表 名取弘史さん



名取さん（左）と高知大環境サークル ESWIQ 和田さん（右）

- ・ 私たち「エコネコ」は、企業や団体で構成された環境保全の活動をしていくネットワークである。自分たちだけで活動するにはなかなか踏み出せない、なかなか大きな活動ができないという企業が結束をして、ひとつの大きなエコ活動を生み出し、なおかつ、情報交流の場を作ることを目的としている。
- ・ 今回行うイベントは、「守ろう仁淀川エコカーニバル in 土佐市」という名称で、大量生産、大量廃棄される服をもったいないと感じ、服の回収をおこない、回収した服の販売を行うものである。この服の売り上げを、「第2次仁淀川清流保全計画」の実践に生かしていくこととし、「守ろう仁淀川エコツアー」というイベントを、8月頃に予定している。仁淀川を五感で触れて、仁淀川を肌で感じるツアーを開催して、保全意識を高めていこうというもの。
- ・ エコネコのメリットとしては3つあって、地域住民のメリットとしては、環境保全、環境意識の向上が期待でき、住みやすい街づくりに繋がっていく。参加団体・参加企業のメリットとしては、地域へエコという形で還元できる。各企業で廃棄物が発生していると思うが、これを地域へエコという形で還元するメリットがある。最後にエコネコとしてのメリットは、企業が会員になっているため、経費が余りかからない。例えば会員のサンブラザさんが、今回のイベントの開催場所の提供を行ってくれている。私ども暮らしの情報社でも、チラシのデザインなどを無料で実施した。高知大学の学生もボランティアとして関わってくれているので、人件費もかかってこない。こういった企業、団体、学生、行政、地域住民が手を取り合って関わりあうことができる、という非常に目新しい団体と思う。ぜひ、今後もエコネコの活動にご注目いただけたらと思う。

( 5 ) 愛媛県久万高原町 面河山岳博物館 上席学芸員 矢野真志さん



- ・簡単に久万高原町の紹介をすると、愛媛県最大の面積を誇り、人口はわずか1万人足らずで、愛媛県内で一番減少率が激しい町である。仁淀川には、久万川と面河川が合流している。場所で言うと松山市から車で40分、高知市から車で60分ぐらいで、どちらから行くにも非常に近い場所に位置している。林業の町で、面積の9割が森林で、うち8割が人工林である。町では自然景観とそこに根ざした文化を売りとした観光を進めている。石鎚、面河系、四国カルストといった、西日本でも第一級の自然が連なっている。面河山岳博物館では、単に自然観察会をしているのではなくて、野外調査や資料収集を実施している。
- ・仁淀川流域の団体が、それぞれ活発に活動され、しかも実績を残されている団体が非常に多いということが分かった。久万高原町としては、仁淀川の原流域に位置していながら、仁淀川流域として捉えていないという認識があり、あまりよくないなと感じている。仁淀川流域としての久万高原町という位置づけを今後していきたい。
- ・仁淀川の水がどこからやってきているかということ、源流域は石鎚山系で、御来光の滝から流れて来ている。御来光の滝までの道は非常に荒れていて、経験の高い人でないとたどり着けないような秘境となっている。非常にすばらしい景色の場所だが、同時に遭難者も毎年出ている。ただ、昔は現流域までの道があったけれども、今は無くなっているという道を再生して、こういうすばらしい自然があるところにも、比較的近づける状況が作れないかと、現在検討している。

( 6 ) NPO 法人仁淀川お宝探偵団 理事長 生野宜宏 さん



- ・ 仁淀川お宝探偵団の活動は、たくさんの人に仁淀川を誇りに思っていていただく為に、仁淀川を愛するものたちのネットワークを広げて、流域の自然、文化、産業を元気にするための活動を行っている。キーワードは、遊ぶ、知る、伝える、守る、で流域を川ガキ天国にしていきたい。とにかく志は高く、視野は広く、仁淀川で遊ぼうということ。遊びまくって知りまくって伝えていこうということ。こういうことが自然を守ることに繋がると思っている。今日お集まりの皆さんも、仁淀川を真剣に考えてくださってるし、仁淀川を守るためのいろんなアイデアをお持ちだと思う。そういった方々が、別々に単独で動いている限りは、小さくまとまってしまい、先細りになってしまうことも多々あると思う。
- ・ このため、ネットワークというか、みんなが共有することによって、どんどん大きくなっていき広がっていくと感じている。県、役場の行政が手伝ってくれるが、それに頼ってしまうと、役場の人事が変わってしまうとそこで終わってしまったりする。そういう面で色々つまづきもあると思っている。そういう意味で、各自が繋がるネットワークを形成しないといけないということを痛感している。仁淀川お宝探偵団は、お宝地図を作って販売したりとか、城下さんがやっているエコツアーとか、大きなイベントとしては、年に1度、毎年8月（今年は8月28日に決定）に、仁淀川国際水きり大会を開催している。この水きり大会では、仁淀川流域の特産物を商品に当てている。すべてボランティアで運営しているがすごく楽しいイベントである。
- ・ そういったイベントを皆さんと共有したいと感じているし、皆さんが開催するイベントがどこでいつやっているか、すぐに伝わるようなツールのようなもの、例えば今日集まっている皆さんのメールアドレスとかを1つにまとめて、グループとして送れば、仁淀川のいろんな団体の方々が情報を共有できるようなものを作ってはどうか皆さん。

( 7 ) 森林総合研究所四国支所 産学官連携推進調整監 田内裕之さん



- ・ 森林総合研究所は、高知市針木にあり、流域からは外れているが、針木には浄水場があり、仁淀川から水を引っ張って来ている。遠くから見たら水がどんどん流れてきてプールを渦巻くように流れて来ている。このように高知市民も仁淀川の恩恵を受けている。
- ・ 仁淀川町で「B スタイル」という新しい事業を昨年の10月からはじめた。地域の資源でうまく生活をする、昔の生活スタイルを作りましょうというのがテーマである。仁淀川町は人口が都市部へ流れていき過疎地域であるが、それであるからこそ自然の資源が地域に眠ったままである。これらを何とかもう一度使って、生活を起こしていきましょうというのが趣旨である。
- ・ 農山村で、小さな副業系の生業をたくさん作って、これらを選びながら生活できるようなスタイルというものを目指している。例えば地域資源で地域の活性化を目指すという中に、エネルギーの自給を目指すというものがあるが、今はすべて石油づけ、つまり化石燃料であり日本のものではなく、当然流域外からのエネルギーに頼っているが、この自給率を上げていこうというものである。

( 8 ) 佐川地質館 館長 橋掛直馬さん



- ・ 今日来ている皆さんは、仁淀川的环境とか、アユとかそういう視点だと思うが、基調講演にもあったように、情報発信していくために、皆さん方がどうやって仁淀川を好きになっていくか。仁淀川は山と川とのコントラスト、地元の人あまり気がついていないが、平野の多い都市部の人とか、アメリカのミシシッピ川、ドイツのライン川などに住んでいる外国の人が、この山と川とのコントラストを見たら驚く。そういう部分で皆さんは当たり前のように思っている景色が、すごく魅力的であること。
- ・ 仁淀川の魅力は地層にあり、水切りでは平べったい石を使うが、この平べったい石は、三波川帯の高圧変成帯の石で、池川の安居渓谷の辺りから流れてきた石が、平べったい石になっている。秩父帯は、どちらかというと堆積岩ばかり。四万十帯は、新しくて後からできたもの。四万十川の石は、仁淀川のようなきれいな石ではない。黒っぽい石ばかり。なぜかというと四万十帯しか通っていないから。だから、これだけすごい川はないということを皆さんも分かって欲しい。山が深いためそれだけ川が印象付けられる。それをアピールしていくことが大事だ。そういう目で見て行って欲しい。
- ・ 水がきれいだ、昆虫が多い、いろんなことを言われているが、仁淀川のすごさというのはこういうものなのだ。3分の1は愛媛県を流れているが、これからは愛媛県と連携をとりながら、水がきれいだ、生き物が棲んでいるだけではなく、山のきれいさ、川のすごさ、これらをもっとアピールすることで観光に活かすと、必ず人が来る。人が来だすと地元の人意識しだして、四万十川のように環境の保全に取り組んでいきますのではないのでしょうか。桂浜の五色の石のような石もあるので、皆さんでアピールして行って欲しい。



(9) 県立仁淀高等学校 3年 大黒真寿実さん

- ・仁淀高校では8年前から、水質調査を行ってきた。私は去年から2年間、水質調査班として活動してきた。調査をする前は、川遊びをする範囲でしか、川と関わる事がなかった。釣りをするとき、虫を捕まえてえさにしていたが、水質調査をすることで、川で捕まえてえさにしていた水生昆虫が、きれいな川の指標生物だと知って驚いた。当たり前にある川のすばらしさを、水質調査をすることで知ることができ、とてもよかった。
- ・仁淀高校は、今年度で閉校ということで、8年間続いていた水質調査も終わることになり、悲しく思っていたが、仁淀中学校が水質調査を引き継いでくれることが決まり、よかったと思った。仁淀中学校の方たちには、水質調査を通して、仁淀川のことを知って好きになってくれれば良いと思う。



仁淀高校卒業生(現・高知大1回生): 井上光也君

- ・ヘビトンボについて話をしてみますが、水生昆虫の中ではすごく変わっていて、3年間ぐらい幼虫で生き、大体嫌われ者だが、目がいい。水生昆虫は目がかわいらしい。動きもかわいらしい。私がこういう風になったのも、何を隠そう、水質調査でずっと眺めていたせいでもあるが、見ていてすごい特徴的な形とか動きとか、陸上の昆虫とは明らかにかけ離れていて、すごく面白い。子どもたちもすごい感激すると思うが、自分もすごい衝撃的だったのですごく好きになって、はまってしまった。
- ・これについていろんなところで話をするが、大体分かってもらえない。えーとか、ふーんとか、流されてしまったり、妹や弟にいたっては半分聞いてくれない。どこへ行ってもわかってくれる人が少ない。そんなことで高知大の理学部で、わかってくれる人がいないか探しているが、今のところ見つかっていない。のめりこむぐらい楽しく、川に関わっていくと見つけることができたが、今度、水質調査が仁淀中学校へ移行することによって、川のことを好きになる子どもたちが、どんどん増えていってくれたら良いと思う。こういう活動も若い人たちに広がって欲しいと考えている。

(10) せっけんのオリーブ 代表 古味知子さん



古味さんが作っているエコせっけん



- ・石鹼おばさんと呼ばれてみたいなと思っているが、まだそこまでには至ってません。石鹼というのは、油と、苛性ソーダと、水の3つがあったら、とりあえず石鹼は出来る。私は最初、廃油石鹼の作り方を教わり、これはいいなと思い、皆さんにお伝えしようと思いい20年以上続けている。
- ・一つだけ、今日皆さんに覚えて帰って欲しいことは、石鹼と合成洗剤の違いがいろいろあるが、その中でも、石鹼は、24時間で水と二酸化炭素に分解することが出来る。環境に負荷をかけないということを覚えて帰って欲しいと思う。合成洗剤は分解することがなかなか難しい。